

日蓮大聖人御書全集

しゅじゅおんふるまいごしよ

種々御振舞御書

新版
1225
〜
1247

しゅじゅおんふるまいごしよ
種々御振舞御書

けんじ ねん
建治2年(76) 55歳 さい
こうにちあま
(光日尼)

い ぶんえいごねんのちのしょうがつじゅうはちにち せいじゅう だいもうここく
去ぬる文永五年後正月十八日、西戎・大蒙古国より

にほんこく 襲 由 ちようじよう にちれん い
日本国をおそうべきよし、牒状をわたす。日蓮が去ぬる

ぶんおうがんねんたいさいかのえさる かんが りっしょうあんこくろん いま
文応元年太歳庚申に勘えたりし立正安国論、今すこしも

違 ふごう しょ はくらくてん がふ こ ほとけ
たがわず符合しぬ。この書は白楽天が楽府にも越え、仏の

みらいき 劣 まっだい ふしぎ ごと 過
未来記にもおとらず。末代の不思議、なに事かこれにすぎん。

けんおう けんしゆ みよ にほんだいいち けんじよう
賢王・聖主の御世ならば、日本第一の勸賞にもおこなわれ、

げんしん だいしごう さだ おん 尋 戦
現身に大師号もあるべし。定めて御たずねありて、いくさの

せんぎ

僉義をもいいあわせ、調伏なんども申しつけられぬらんと

じようぶく

もう

思

おもいしに、その義なかりしかば、その年の末十月に

とし

すえじゆうがつ

じゆういつつう

じよう

書

方

々

驚

もう

十一通の状をかきて、かたがたへおどろかし申す。

くに

けんじん

国に賢人なんどもあるならば、「不思議なることかな。こ

只

てんしやうだいじん

しやうはちまんぐう

れはひとえにただ事にはあらず。天照太神・正八幡宮の

そう

付

にほんこく

助

おんはか

この僧について、日本国のたすかるべきことを御計らいの

思

つか

あるか」とおもわるべきに、さはなくて、あるいは使いを

あつく

欺

取

い

悪口し、あるいはあざむき、あるいはとりも入れず、ある

へんじ

へんじ

かみ

もう

いは返事もなし。あるいは返事をなせども上へも申さず。

只 ごと

にちれん み

これひとえにただ事にはあらず。たとい日蓮が身のことな

こくしゆ

政

ひとびと

と

次

りとも、国主となり、まつりごとをなさん人々は、取りつぎ

もう

せいどう

ほう

況

かみ

申したらんには政道の法ぞかし。いおうや、このことは上の

おんだいじ出

来

おのおの

み

御大事いできたらんのみならず、各々の身にあたりて、お

歎

しゅつたい

もち

おいなるなげき出来すべきことぞかし。しかるを、用いる

あつく

ことこそなくとも、悪口まではあまりなり。これひとえに、

にほんこく

じようげばんにん

いちにん

ほけきよう

ごうてき

年

日本国の上下万人、一人もなく法華経の強敵となりてとし

久

たいか

積

だいきじん

おのおの

み

い

ひさしくなりぬれば、大禍のつもり、大鬼神の各々の身に入

うえ

もうここく

ちようじよう

しようねん

抜

狂

る上、蒙古国の牒状に正念をぬかれてくるうなり。

例せば、殷の紂王、比干といいし者いさめをなせしかば、

もち

むね

堀

しゆう

ぶん

ぶおう

滅

ごおう

用いずして胸をほり、周の文・武王にほろぼされぬ。呉王

ごししよ

諫

もち

じがい

えつおう

こうせん

は伍子胥がいさめを用いず自害をせさせしかば、越王・勾践

て

彼

の手にかかる。これもかれがごとくなるべきかと、いよい

不便

覚

な

惜

いのち

捨

ごうじよう

よふびんにおぼえて、名をもおしままず命をもすてて強盛

もう

張

かぜだい

なみだい

りゆうだい

あめ

に申しはりしかば、風大なれば波大なり、竜大なれば雨

猛

怨

憎

たけきように、いよいよあだをなし、ますますにくみて、

ごひようじよう

せんぎ

くび

刎

かまくら

追

御評定に僉議あり。「頸をはぬべきか、鎌倉をおわるべき

でしだんなとう

しよりよう

もの

しよりよう

め

くび

き

か。弟子檀那等をば、所領あらん者は所領を召して頸を切

れ、あるいはろうにてせめ、あるいは遠流すべし」等云々。
牢 責 おんる どううんぬん

日蓮悦んで云わく、本より存知の旨なり。雪山童子は半偈
にちれんよろこ い もと ぞんち むね せつせんどうじ はんげ

のためみ 投に身をなげ、常啼菩薩は身をうり、善財童子は火に入
じょうたいぼさつ み 売 ぜんざいどうじ ひ い

り、樂法梵志は皮をはぐ。藥王菩薩は臂をやく。不輕菩薩は
ぎようぼうほんじ かわ 剥 やくおうぼさつ ひじ 焼 ふきようぼさつ

杖木をじようもく 被ここうむり、師子尊者は頭をはねられ、提婆菩薩は
ししそんじや こうぐ 刎 だいばぼさつ

外道にげどう 殺ころさる。これらはいかなりける時ぞやと勘うれば、
とぎ かんが

天台大師は「時にてんだいだいし とき かな 書適うのみ」とかかれ、章安大師は「取捨
しやうあんたいし しゆしや

宜しきを得て、一向によろ え いくこう 記すべからず」としるされ、法華経は
ほけきよう

一法なれども、機いっぽう き ときにしたがい時によりて、その行万差なる
ぎようばんさ

べし。

ほとけしる

のたま

わ めつご

しょうぞうにせんねん

まっぽう

仏記して云わく「我が滅後、正像二千年すぎて末法の

はじ

ほけきよう

かんじん

だいもく

ごじ

ひろ

始めに、この法華経の肝心・題目の五字ばかりを弘めんも

しゅつたい

とき

あくおう

あくび くとう

だいちみじん

おお

の出来すべし。その時、悪王・悪比丘等、大地微塵より多

だいじよう

しょうじようとう

競

くして、あるいは大乘、あるいは小乗等をもつてきそわ

だいもく

ぎようじや

責

ざいけ

だんなとう

んほどに、この題目の行者にせめられて、在家の檀那等を

語

罵

打

牢

かたらいて、あるいはのり、あるいはうち、あるいはろうに

い

しよりよう

め

るぎい

くび

入れ、あるいは所領を召し、あるいは流罪、あるいは頸を

刎

たいてん

広

怨

はぬべしなどいとも、退転なくひろむるほどならば、あだ

をなすものは、こくしゆ 国主はどし打ちをはじめ、がき 餓鬼のごとく身み

食

のち

たこく

責

ぼんてん

くらい、後には他国よりせめらるべし。これひとえに梵天・

たいしやく

にちがつ

してんとう

ほけきよう

かたき

くに

たこく

せ

帝釈・日月・四天等の、法華経の敵なる国を他国より責め

たも

説

そうろう

させ給うなるべし」ととかれて候ぞ。

おのおのわ

でし

名乗

ひとびと

ひとり

臆

思

各々我が弟子となのらん人々は、一人もおくしおもわるべ

親

妻子

しよりよう

顧

からず。おやおやおもい、めこをおもい、所領をかえりみる

むりようこう

親子

しよりよう

ことなかれ。無量劫よりこのかた、おやこのため、所領の

いのち

だいちみじん

多

ほけきよう

ために命すてたることは大地微塵よりもおおし。法華経の

いちど

ほけきよう

ぎよう

ゆえにはいまだ一度もすてず。法華経をばそこばく行ぜし

しゅつたい

たいてん

止

たと

かども、かかると出来せしかば、退転してやみにき。譬え

湯

沸

みず

い

ひ

き

遂

ば、ゆをわかして水に入れ、火を切るにとげざるがごとし。

おのおのおも

き

たま

み

ほけきよう

替

いし

こがね

各々思い切り給え。この身を法華經にかうるは、石に金を

ふん

こめ

かえ、糞に米をかうるなり。

ほとけ

めつごにせんにひやくにじゅうよねん

あいだ

かしよう

あなんとう

めみよう

仏の滅後二千二百二十余年が間、迦葉・阿難等、馬鳴・

りゆうじゆとう

なんがく

てんだいとう

みようらく

でんぎようとう

弘

竜樹等、南岳・天台等、妙楽・伝教等だにも、いまだひろ

たま

ほけきよう

かんじん

しよぶつ

がんもく

みようほうれんげきよう

ごじ

め給わぬ法華經の肝心、諸仏の眼目たる妙法蓮華經の五字、

まつぼう

はじ

いちえんぶだい

広

たも

ずいそう

にちれん

末法の始めに一閻浮提にひろまらせ給うべき瑞相に、日蓮

先 駆

さきがけしたり。

和 党

にじんさんじん

かしよう

あなん

すぐ

てんだい

わとうども二陣三陣つづきて、迦葉・阿難にも勝れ、天台・

でんぎよう

超

こじま

主

脅

伝教にもこえよかし。わずかの小島のぬしらがおどさんを

怖

えんまおう

責

ほとけ

おんつかい

おじては、閻魔王のせめをばいかんがすべき。仏の御使

名乗

臆

むげ

ひとびと

もう

含

となのりながらおくせんは、無下の人々なりと申しふくめぬ。

ねんぶつしゃ

じさい

しんごんしとう

じしん

ち

およ

さりしほどに、念仏者・持斎・真言師等、自身の智は及ば

そじよう

かな

じようろう

あま 御 前

取

付

ず訴状も叶わざれば、上臈・尼ごぜんたちにとりつきて

しゆじゆ

構

もう

こさいみようじにゆうどうどの

ごくらくじにゆうどうどの

種々にかまえ申す。「故最明寺入道殿・極楽寺入道殿を

むけんじこく

お

もう

けんちようじ

じゆふくじ

ごくらくじ

無間地獄に堕ちたりと申し、建長寺・寿福寺・極楽寺・

ちようらくじ

だいぶつじとう

焼

払

もう

どうりゆうしようにん

りようかん

長楽寺・大仏寺等をやきはらえと申し、道隆上人・良観

しようにんとう

くび 刎

もう

ごひようじよう

上人等を頸をはねよと申す。御評定になにとなくとも、

にちれん

ざいか

免

かみくだん

いちじようもう

日蓮が罪禍まぬかれがたし。ただし、上件のこと一定申す

めい

尋

めい

かと、召し出だしてたずねらるべし」とて、召し出だされ

ぬ。

ぶぎようにん

い

かみ

もう

奉行人の云わく「上のおおせ、かくのごとし」と申せし

かみくだん

いちごん

違

もう

さいみようじ

かば、「上件のこと、一言もたがわず申す。ただし、最明寺

どの ごくらくじどの

じごく

虚言

ほうもん

殿・極楽寺殿を地獄ということはそらごとなり。この法門は、

さいみようじどの

ごくらくじどの

ごぞんしよう

とき

もう

せん

最明寺殿・極楽寺殿、御存生の時より申せしことなり。詮ず

かみくだん

くに

もう

るところ、上件のことどもは、この国をおもいて申すこと

なれば、世を安穩よ あんのんにたもたんとおぼさば、彼の法師思 か ほつしばらを召め

し合あわせてきこしめせ。さなくして、彼らかれにかわりて理不代 りふじん尽

に失とがに行おこなわゆるるほどならば、国くにに後悔こうかいあるべし。日蓮御勘にちれんごかんき気

をか被ぼらば、仏ほとけの御使おんつかいを用もちいぬになるべし。梵天ぼんでん・帝釈たいしゃく・

日月にちがつ・四天してんの御おんとがめありて、遠流おんる・死罪しざいの後のち、百日ひやくにち・一年いちねん・

三年さんねん・七年しちねんが内うちに、自界じかい叛逆ほんぎやく難なんとて、この御一門ごいちもんどしうち同 士 討 始はじ

まるべし。その後のちは、他国たこく侵逼しんぴつ難なんとて、四方しほうより、ことには

西方さいほうよりせめられさせ給責 たもうべし。その時とき、後悔こうかいあるべし」

と平左衛門尉へいのかえもんに申し付けしかども、太政入道だいいじょうのくる狂い

しように、すこしもはばかることなく物にくるう。もの

い ぶんえいはちねんたいさいかのとひつじくがつじゅうににち ごかんき 被

去ぬる文永八年太歳辛未九月十二日、御勘気をかぼる。

とき ごかんき 様 つね ほう 過 見 りようこう

その時の御勘気のようにも、常ならず法にすぎてみゆ。了行

むほん たいふのりつし よ 乱 召 取

が謀反をおこし、大夫律師が世をみださんとせしをめしと

超 へいのさえもんのじよう たいしよう すうひやくにん

られしにもこえたり。平左衛門尉、大将として、数百人

つわもの 胴 丸 着 烏 帽 子 懸 まなこ

の兵者にどうまるきせて、えぼうしかけて、眼をいから

こえ 荒 だいたい こと こころ あん だいじようのにゆうどう

し声をあろうす。大体、事の心を案ずるに、太政入道の

よ 執 くに 破 似 只 ごと

世をとりながら国をやぶらんとせしににたり。ただ事とも

みえず にちれん み 思 様 ひ つき 思

みえず。日蓮これを見ておもうよう、「日ごろ月ごろおもい

設

もうけたりつることは、これなり。さいわいなるかな、

ほけきよう

み

臭

頭

放

法華経のために身をすてんことよ。くさきこうべをはなた

すな

こがね

替

いし

たま

商

れば、沙に金をかえ、石に珠をあきなえるがごとし」。

へいのさえものじよう

いち

ろうじゆう

しようぼう

もう

もの

走

さて、平左衛門尉が一の郎従・少輔房と申す者、はしり

寄

にちれん

かいちゆう

ほけきよう

だいご

まき

と

い

よりて、日蓮が懐中せる法華経の第五の巻を取り出だして、

面

さんど

苛

打

散

おもてを三度さいなみて、さんざんとうちちらす。また、

くかん

ほけきよう

つわもの

う

散

あし

踏

九巻の法華経を兵者ども打ちちらして、あるいは足にふみ、

み

纏

板

敷

畳

とう

いえ

あるいは身にまとい、あるいはいたじき・たたみ等、家の

に

さんけん

散

ところ

二・三間にちらさぬ所もなし。

にちれん

だいこうしよう

はな

もう

日蓮、大高声を放って申す。「あらおもしろや、

へいのさえものじよう

物

狂

み

殿

原

ただいま

にほん

平左衛門尉がものにくるうを見よ。とのばら、但今、日本

こく

はしら

倒

呼

じようげばんにん

み

国の柱をたおす」とよばわりしかば、上下万人あわてて見

にちれん

ごかんき

被

臆

み

えし。日蓮こそ御勘気をかばればおくして見ゆべかりしに、

僻

事

思

つわもの

さはなくして、「これはひがごとなり」とやおもいけん、兵者

色

変

み

どものいろこそへんじて見えしか。

とおか

じゆうにちち

あいだ

しんごんしゆう

とが

ぜんしゆう

ねんぶつとう

十日ならびに十二日の間、真言宗の失、禅宗・念仏等、

りようかん

あめ

へいのさえものじよう

言

聞

良観が雨ふらさぬこと、つぶさに平左衛門尉にいいきか

笑

怒

せてありしに、あるいはどつとわらい、あるいはいかりな

んどせしことどもは、しげければしるさず。繁記

栓

せんずるところは、六月十八日より七月四日まで、良観りようかん

あめ

祈

にちれん

ささ

下

汗

が雨のいのりして、日蓮に支えられてふらしかね、あせを

流

涙

ふ

あめ

うえ

ぎやくふう

隙

無

ながしなんだのみ下らして、雨ふらざりし上、逆風ひまな

さんど

使

遣

いちじよう

堀

くてありしこと、三度までつかいをつかわして「一丈のほり

超

じゆうじようにじゆうじよう

超

をこえぬもの、十丈二十丈のほりをこうべきか。

和泉式部

色

好

み

はっさいかい

制

いずみしきぶ、いろごのみの身にして、八斎戒にせいせる

歌

詠

あめ

のういんほつし

はかい

み

うたをよみて雨をふらし、能因法師が破戒の身として、う

てんう

ふ

にひやくごじっかい

ひとびと

たをよみて天雨を下らせしに、いかに二百五十戒の人々

ひやくせんにん

しちにちにしちにち責

たも

あめ ふ

百千人あつまりて、七日二七日せめさせ給うに、雨の下ら

うえ

おおかぜ

ふ

そうろう

ぞん

たま

ざる上に大風は吹き候ぞ。これをもつて存ぜさせ給え。

おのおの

おうじよう

かな

責

りようかん

泣

各々の往生は叶うまじきぞ」とせめられて良観がなきし

ひとびと

付

ざん

いちいち

もう

こと、人々につきて讒せしこと、一々に申せしかば、

へいのさえものじようとう

方

人

叶

詰

伏

平左衛門尉等かとうどしかなえずしてつまりふししこと

繁

書

どもは、しげければかかず。

じゆうににち

よ

むさしのかみどの

預

やはん

およ

さては十二日の夜、武蔵守殿のあずかりにて、夜半に及び

くび

き

かまくら

出

若

宮

小

路

打

頸を切らんがために鎌倉をいでしに、わかみやこうじにう

出

しほう

つわもの

打

包

ちいでて、四方に兵のうちつつみてありしかども、日蓮云

にちれんい

おのおの

たも

別

はちまんだいぼさつ

わく「各々さわがせ給うな。べちのことはなし。八幡大菩薩

さいごい もう

うま

差

降

こうしよう

に最後に申すべきことあり」とて、馬よりさしおりて高声

もう

はちまんだいぼさつ

真

かみ

わけのきよまる

に申すよう、「いかに八幡大菩薩はまことの神か。和気清丸

くび

は

とき

たけいちじよう

つき

あらわ

たま

が頸を刎ねられんとせし時は、長一丈の月と顕れさせ給

でんぎようだいし

ほけきよう

講

たま

とき

紫

い、伝教大師の法華経をこうぜさせ給いし時は、むらさき

けさ

おんふせ

授

たま

いま

にちれん

にほんだいいち

の袈裟を御布施にさずけさせ給いき。今、日蓮は日本第一の

ほけきよう

ぎようじや

うえ

み

いちぶん

過

にほん

法華経の行者なり。その上、身に一分のあやまちなし。日本

こく

いつさいしめじよう

ほけきよう

ぼう

むけんだいいじよう

墮

国の一切衆生の法華経を謗じて無間大城におつべきを

助

もう

ほうもん

だいまうここく

くに

たすけんがために申す法門なり。また、大蒙古国よりこの国

責

てんしょうだいじん

しょうはちまん

あんのん

をせむるならば、天照太神・正八幡とても安穩におわす

うえ

しゃかぶつ

ほけきよう

と

たま

たほうぶつ

べきか。その上、釈迦仏、法華経を説き給いしかば、多宝仏・

じつぼう

もろもろ

ぶつぼさつ

ひ

ひ

つき

つき

ほし

十方の諸の仏菩薩あつまりて、日と日と、月と月と、星と

ほし

かがみ

かがみ

並

とき

むりよう

星と、鏡と鏡とをならべたるがごとくなりし時、無量の

しよてん

てんじく

かんど

にほんこくとう

ぜんじん

しょうにん

諸天ならびに天竺・漢土・日本国等の善神・聖人あつまり

とき

おのおの

ほけきよう

ぎようじゃ

疎

よし

たりし時、『各々、法華経の行者におろかなるまじき由の

せいじよう

責

いちいち

ごせいじよう

た

誓状まいらせよ』とせめられしかば、一々に御誓状を立て

にちれん

もう

急

られしぞかし。さるにては、日蓮が申すまでもなし。いそぎ

せいじよう

しゆくがん

遂

たも

いそぎこそ誓状の宿願をとげさせ給うべきに、いかにこ

ところ

落合

たま

高

々

もう

の処にはおちあわせ給わぬぞ」と、たかだかと申す。

さいご

にちれん

こんやくびき

りようぜんじようど

参

さて最後には、「日蓮、今夜頸切られて霊山浄土へまいり

とき

てんしやうだいじん

しやうはちまん

きしやう

もち

てあらん時は、まず『天照太神・正八幡こそ起請を用い

神

そうつら

差切

きやうしゆしやくそん

もう

あ

ぬかみにて候いけれ』とさしきりて、教主釈尊に申し上

そうつら

痛

思

急

おんはか

げ候わんずるぞ。いたしとおぼさば、いそぎいそぎ御計ら

うま

乗

いあるべし」とて、また馬にのりぬ。

由比

浜

打

出

ご

霊

前

至

ゆいのはまにうちいでて、御りようのまえにいたりて、

い

殿

原

告

ひと

また云わく「しばし、とのぼら。これにつぐべき人あり」

なかつかさのさぶろうぎやえものじよう

もう

もの

くまおう

もう

とて、中務三郎左衛門尉と申す者のもとへ熊王と申す

童子どうじをつか遣わしたりしかば、いそ急ぎいでぬ。出

こんや くびき

罷

すうねん あいだねが

「今夜、頸切られへまかるなり。この数年が間願いつる

しやばせかい

雉

とき

鷹

ことこれなり。この娑婆世界にして、きじとなりし時はたか

擱

鼠

とき

猫

食

につかまれ、ねずみとなりし時はねこにくらわれき。あるい

妻子

み

うしな

だいちみじん

おお

はめこのかたきに身を失いしこと、大地微塵より多し。

ほけきよう

おん

いちど

うしな

にちれん

法華経の御ためには一度だも失うことなし。されば、日蓮、

ひんどう

み

う

ふぼ

こうよう

こころ

足

くに

おん

ほう

貧道の身と生まれて、父母の孝養、心にたらず。国の恩を報

ちから

こんど

くび

ほけきよう

たてまつ

くどく

ずべき力なし。今度、頸を法華経に奉つて、その功德を

ふぼ

えこう

でしだんなとう

省

もう

父母に回向せん。そのあまりは弟子檀那等にはぶくべしと申

もう

さえものじようきようだいよにん うま

せしこと、これなり」と申せしかば、左衛門尉兄弟四人、馬

くち

腰越竜 くち

の口にとりつきて、こしごえたつの口にゆきぬ。

思

あん 違

ここにぞあらんずらんとおもうところに、案にたがわ

つわもの

打回

さえものじようもう

様

ず、兵士どもうちまわり、さわぎしかば、左衛門尉申すよう

ただいま

泣

にちれんもう

ふ 覚

殿 原

「只今なり」となく。日蓮申すよう「不かくのとのばらかな。

よろこ

笑

約 東

違

これほどの悦びをばわらえかし。いかにやくそくをばたが

もう

とき

え

島

方

つき

えらるるぞ」と申せし時、江のしまのかたより月のごとく

光

もの

鞆

たつみ

方

いぬい

ひかりたる物、まりのようにて、辰巳のかたより戌亥のか

光

渡

じゆうににち

よ

明 暮

ひと

おもて

見

たへひかりわたる。十二日の夜のあけぐれ、人の面もみえ

もの

つき夜

ひとびと

おもて

皆 見

ざりしが、物のひかり月よのようにて、人々の面もみなみ

たちと

め 眩

倒

ふ

つわもの

怯

おそ

ゆ。太刀取り目くらみ、たおれ臥し、兵どもおじ怖れ、

興 醒

いっちよう

馳

退

うま

降

きようさめて、一町ばかりはせのき、あるいは馬よりおり

畏

うま

うえ

蹲

てかしこまり、あるいは馬の上にてうずくまれるもあり。

にちれんもう

殿

原

たいか

めしゆうど

日蓮申すよう「いかにとのばら、かかる大禍ある召人には

遠

ちか

う

寄

う

高

々

とおのくぞ。近く打ちよれや、打ちよれや」と、たかだかと

呼

急

寄

ひと

夜明

よばわれども、いそぎよる人もなし。「さて、よあけば、い

くびき

急

き

よあ

見

かにいかに。頸切るべくばいそぎ切るべし。夜明けなばみ

苦

勸

返事

ぐるしかりなん」とすすめしかども、とかくのへんじもな

し。

相模 依智 もう

はるかばかりありて云いわく「さがみのえちと申すところ

いはるかばかりありて云いわく「さがみのえちと申すところ

へ入いらせ給たまえ」と申もうす。「これは道知る者なし。さきうちす

ひと休

べし」と申もうせども、うつ人もなかりしかば、さてやすらう

つわものい みち そうら

ほどに、ある兵士の云いわく「それこそ、その道にて候え」

もうと申もうせしかば、道みちにまかせてゆく。午時うまのときばかりにえちと申もう

すところへゆ行きつきたりしかば、本間六郎左衛門ほんまのろくろうざえもんがいえに

着 家

入りぬ。

い

入りぬ。

酒取寄 武士 飲

さけとりよせて、もののふどもにのませてありしかば、

おのおの 帰

頭

て

様

各 かえるとて、こうべをうなだれ、手をあざえて申すよう

ひと

われ

侍

「このほどは、いかなる人にてやおわすらん、我らがたのみ

そうろうあみだぶつ

謗

たも

承

憎

て 候 阿弥陀仏をそしらせ給うとうけたまわればにくみま

そうら

目 当

押

そうら

いらせて候いつるに、まのあたりおがみまいらせ候いつ

み

そうら

尊

年

来 もう

ることどもを見て候えば、とうとさに、としごろ申しつる

ねんぶつ

捨

そうら

火 打

袋

数 珠 取

出

念仏はすて候いぬ」とて、ひうちぶくろよりずずとりいだ

捨

もの

いま

ねんぶつもう

誓

状

立

してすつる者あり。「今は念仏申さじ」と、せいじようをた

もの

ろくろうざえもん

ろうじゆうとう

ばん

受

取

つる者もあり。六郎左衛門が郎従等、番をばうけとりぬ。

左 衛 門

尉

帰

さえもんのじようもかえりぬ。

ひ いぬのとき

鎌 倉

かみ おんつか

その日の戌時ばかりに、かまくらより上の御使いとて、

立 文 持 き くびき

重 おんつか

たてぶみをもつて来ぬ。頸切れというかさねたる御使いか

武 士 思

ろくろろろぎ えもん

と、もののふどもはおもいてありしほどに、六郎左衛門が

だいかん うま 允 もう もの たて 文

走 きた

代官・右馬のじょうと申す者、立ぶみもちてはしり来り、

跪 もう こんや そろろろ

ひざまずいて申す。「今夜にて候べし。あらあさましやと

ぞん そろろろ おんよろこ おん きた そろろろ

存じて候いつるに、かかる御悦びの御ふみ来つて候。

むさしのかみどの きょうろのとき 熱海 おん湯 おんい そろろろ

『武蔵守殿は、今日卯時にあたみの御ゆへ御出で候えば、

文 無 走 参

いそぎあやなきこともやと、まずこれへはしりまいりて

そろろろろ 鎌 倉 おん 使 ふたとき 走

候』と申す。かまくらより御つかいは二時にはしりて

そうろう こんや うち 熱海 おん湯 走

候。今夜の内にあたみの御ゆへはしりまいるべしとて、

罷出

まかりいでぬ」。

おいじょう い ひと 科 ひと いま

追状に云わく「この人はとがなき人なり。今しばらくあ

許 たも 過 こうかい

りてゆるさせ給うべし。あやまちしては後悔あるべし」と

うんぬん

云々。

よ じゅうさんにち つわもの すうじゅうにん ぼう あた

その夜は十三日、兵士ども数十人、坊の辺り、ならび

おおにわ 並 居 そうら くがつじゅうさんにち よ つきおお

に大庭になみいて候いき。九月十三日の夜なれば、月大い

晴 よなか おおにわ た い つき む

にはれてありしに、夜中に大庭に立ち出でて月に向かい

たてまつ じがげしようしよう たてまつ しようれつ しょうれつ ほけきよう

奉 っ て、自我偈少々よみ奉り、諸宗の勝劣、法華経

もん 粗々もう

いま がってん

ほけきよう

みぎ

の文あらあら申して、「そもそも今の月天は、法華経の御座

つら

みようがってんし

ほうとうほん

ぶつちよく

に列なりまします名月天子ぞかし。宝塔品にして仏勅をう

たま

ぞくるいほん

ほとけ

いただき

摩

せそん

け給い、嘱累品にして仏に頂をなでられまいらせ、『世尊

みことのり

まさ

ぶぎよう

せいじよう

立

の勅のごとく、当につぶさに奉行すべし』と誓状をたて

てん

ぶつぜん

ちか

にちれん

むな

し天ぞかし。仏前の誓いは日蓮なくば虚しくてこそおわすべ

いま

しゅつたい

よろこ

ほけきよう

けれ。今かかること出来せば、いそぎ悦びをなして法華経

ぎようじや

代

ぶつちよく

果

せいごん

験

の行者にもかわり、仏勅をもはたして、誓言のしるしを

遂

たも

いま

ふしぎ

ばとげさせ給うべし。いかに、今しるしのなきは不思議に

そろう

くに

かまくら

候ものかな。いかなることとも国になくしては、鎌倉へも

帰

おも

嬉

顔

かえらんとおもわず。しるしこそなくとも、うれしがおに

す わた

おも

だいじつきよう

にちがつ

みよう

げん

て澄み渡らせ給うはいかに。大集経には『日月も明を現ぜ

説

にんのうきよう

にちがつど

うしな

書

ず』ととかれ、仁王経には『日月度を失う』とかかれ、

さいしようおうきよう

さんじゆうさんてん

おのおのしんこん

しよう

み

最勝王経には『三十三天、各瞋恨を生ず』とこそ見え

はべ

がつてん

がつてん

責

験

侍るに、いかに月天、いかに月天」とせめしかば、そのしるし

てん

みようじよう

おおほしくだ

まえ

うめ

き

にや、天より明星のごとくなる大星下つて、前の梅の木

えだ

武士

みな 縁

飛

降

枝にかかりてありしかば、もののふども、皆えんよりとびお

おおにわ

平 伏

いえ

逃

り、あるいは大庭にひれふし、あるいは家のうしろへにげ

すなわ

てん 搔

曇

おおかぜふ

きた

え

しま

ぬ。やがて即ち天かきくもりて、大風吹き来つて、江の島

鳴

そら

響

おお

鼓

う

のなるとて、空のひびくこと大いなるつづみを打つがごと

し。

よあけ

じゅうよつかうのとき

じゅうろうにゆうどう

もう

きた

夜明くれば、十四日卯時に、十郎入道と申すもの、来つ

い

きのう

よる

いぬのとき

守

殿

おお

て云わく「昨日の夜の戌時ばかりに、こうどのに大いなる

騒

おんみようじ

め

おん

占

そうら

もう

さわぎあり。陰陽師を召して御うらない候えば、申せしは

おお

くに

乱

そうろう

ごぼう

ごかんき

『大いに国みだれ候べし。この御房、御勘気のゆえなり。』

急

め

返

よ

なか

そうろう

いそぎいそぎ召しかえさずんば、世の中いかが候べかる

もう

許

た

そうら

もう

ひと

らん』と申せば、『ゆりさせ給ひ候え』と申す人もあり。

ひやくにち

うち

いくさ

もう

ま

また『百日の内に軍あるべしと申しつれば、それを待つ

べし』とも申す。もう

えち

にじゅうよにち

あいだ

かまくら

ひ

付

依智にして二十余日、その間、鎌倉に、あるいは火をつ

しち

はちど

ひと

殺

隙

無

ざんげん

くること七・八度、あるいは人をころすことひまなし。讒言

もの

い

にちれん

でし

ひ

付

の者どもの云わく「日蓮が弟子どもの火をつくるなり」と。

にちれん

でしとう

かまくら

お

「さもあるらん」とて、「日蓮が弟子等を鎌倉に置くべから

にひやくろくじゅうよにん

記

みなおんとう

つか

ず」とて、二百六十余人しるさる。「皆遠島へ遣わすべし。

牢

でし

くび

劊

き

ろうにある弟子どもをば頸をはねらるべし」と聞こう。さ

ひ

とう

じさい

ねんぶつしや

はか

ごと

るほどに、火をつくる等は持斎・念仏者が計り事なり。そ

よ

繁

書

の余はしげければかかず。

どうじゆうがつとおか えち た どうじゆうがつにじゆうはちにち さどのくに

同十月十日に依智を立て、同十月二十八日に佐渡国

つ じゆういちがつついたち ろくろうさえもん いえ つかはら

へ着きぬ。十一月一日に六郎左衛門が家のうしろ、塚原と

もう さんや なか らくよう れんだいの しびと す ところ

申す山野の中に、洛陽の蓮台野のように死人を捨つる所に、

いっけんしめん どう ほとけ うえ 板 間 しへき

一間四面なる堂の、仏もなし。上はいたまあわず、四壁は

荒 ゆき降 積 き ところ

あばらに、雪ふりつもりて消ゆることなし。かかる所に

敷 皮 う 敷 敷 みの打 着 よ 明 ひ 暮

しきがわ打ちしき、蓑うちきて、夜をあかし、日をくらす。

よる ゆき ひょう らいでん ひる ひ ひかり 差 たま

夜は雪・雹・雷電ひまなし。昼は日の光もささせ給わず。

こころぼそ 住 か りりよう ここく い

心細かるべきすまいなり。彼の李陵が胡国に入つて

巖 窟 責 ほうどうさんぞう きそうこうてい 責

がんくつにせめられし、法道三蔵の徽宗皇帝にせめられて

かお 火 印 差 こうなん 放 ただいま 覚

面にかなやきをささされて江南にはなたれしも、只今とおぼ

ゆ。

だんのう あしせんじん 責 ほけきよう

あらうれしや。檀王は阿私仙人にせめられて、法華経の

くどく えたま ふきようぼさつ じようまん びくとう つえ

功德を得給いき。不軽菩薩は上慢の比丘等の杖にあたりて、

いちじよう ぎようじや たも いま にちれん まっぼう う

一乗の行者といわれ給う。今、日蓮は、末法に生まれて

みようほうれんげきよう ごじ ひろ 責 ほとけめつど

妙法蓮華経の五字を弘めてかかるせめにあえり。仏滅度し

のちにせんにひやくよねん あいだ おそ てんだいちしやだいし いっさいせけん

て後二千二百余年が間、恐らくは天台智者大師も「一切世間

あだおお しん がた きようもん ぎよう たま

に怨多くして信じ難し」の経文をば行じ給わず。「しばし

ひんずい みようもん にちれんひとり いっくいちげ

ば擯出せられん」の明文は、ただ日蓮一人なり。「二句一偈、

われ みな じめき われ あのくたらさんみやくさんぼだい うたが
我は皆ために授記す」は我なり。阿耨多羅三藐三菩提は疑い
なし。

さがみのかみどの ぜんちしき へいのさえもん だいばだった ねんぶつしや
相模守殿こそ善知識よ、平左衛門こそ提婆達多よ。念仏者
くぎやりそんじや じさいとう ぜんしようびく ざいせ いま
は瞿伽利尊者、持斎等は善星比丘なり。在世は今にあり、今
ざいせ ほけきよう かんじん しょほうじつそう 説 ほん
は在世なり。法華経の肝心は、「諸法実相」ととかれて「本と
まつ くきよう ひと 述 そうろう
末とは究竟して等し」とのべられて候はこれなり。

まかし かんだいご い ぎようげすで つと さんしようしま
摩訶止観第五に云わく「行解既に勤めぬれば、三障四魔、

ふんぜん きそ お もん こんぜん す
紛然として競い起こる」文。また云わく「猪の金山を摺り、
しゆる うみ い たきぎ ひ さか かせ ぐら ま
衆流の海に入り、薪の火を熾んにし、風の求羅を益すがご

とうろうんぬん　しやく　こころ　ほけきよう　おし

ときのみ」等云々。釈の心は、法華経を教えのごとく、機き

かな　とき　かな　げぎよう　なな　だいじしゅつたい　なか

に叶い時に叶って解行すれば、七つの大事出来す。その中

てんしま　だいろくてん　まおう　こくしゆ　ふぼ

に天子魔とて、第六天の魔王、あるいは国主、あるいは父母、

さいし　だんな　あくにんとう　付

あるいは妻子、あるいは檀那、あるいは悪人等について、

したが　ほけきよう　ぎよう　障　い　障

あるいは随って法華経の行をさえ、あるいは違してさう

きよう　ぎよう　ぶつぼう　ぎよう

べきことなり。いずれの経をも行ぜよ、仏法を行ずるに

ぶんぶん　したが　るなん　なか　ほけきよう　ぎよう

は分々に随って留難あるべし。その中に、法華経を行ず

じうじよう　障　ほけきよう　教

るには強盛にさうべし。法華経をおしえのごとく、時機に

あ　ぎよう　こと　なん　じき

当たって行ずるには、殊に難あるべし。

ゆえ ぐけつ はち い しゅじょう しょうじ い ぶつじょう
故に、弘決の八に云わく「もし衆生、生死を出でず、仏乘

を慕わずと知らば、魔は、この人において、なお親の想いを

生ず」等云々。釈の心は、人、善根を修すれども、念仏・

真言・禅・律等の行をなして法華經を行ぜざれば、魔王、

親のおもいをなして、人間につきて、その人をもてなし供養

す。世間の人に実の僧と思わせんがためなり。例せば、国主

のたつとむ僧をば諸人供養するがごとし。されば、国主等の

かたきにするは、既に正法を行ずるにてあるなり。

釈迦如来の御ためには提婆達多こそ第一の善知識なれ。今

敵

しやくかによらい おん

だいばだつた

だいいち ぜんちしき

いま

すで しょうほう ぎよう

にんげん 付

おも

くよう

れい こくしゆ

こくしゆとう

せけん

み

ひと

方

人

ごうてき

の世間を見るに、人をよくなすものは、かとうどよりも強敵

ひと

がんぜん

み

かまくら

が人をばよくなしけるなり。眼前に見えたり。この鎌倉の

ごいちもん

ごはんじよう

よしもり

おきのほうおう

御一門の御繁昌は、義盛と隠岐法皇ましまさずんば、いかで

にほん

しゆ

たも

ひとびと

ごいちもん

か日本の主となり給うべき。されば、この人々はこの御一門

おん

だいいち

方

人

にちれん

ほとけ

だいいち

の御ためには第一のかとうどなり。日蓮が仏にならん第一

方

人

かげのぶ

ほっし

りようかん

どうりゆう

どうあみだぶつ

のかとうどは景信、法師には良観・道隆・道阿弥陀仏、

へいのさえもんのじよう

こうのとの

ほけきよう

ぎようじや

平左衛門尉・守殿ましまさずんば、いかでか法華経の行者

よろこ

とはなるべきと悦ぶ。

過

にわ

ゆき

通

どう

かくてすごすほどに、庭には雪つもりて人もかよわず、堂

荒 かせ ほか 訪

まなこ しかん

にはあらし風より外はおとずるものなし。 眼には止観・

ほっけ 晒 うち なんみょうほうれんげきょう とな よる つき ほし

法華をさらし、口には南無妙法蓮華経と唱え、夜は月・星に

む たてまつ しょしゅう いもく ほげきょう じんぎ だん

向かい 奉 っ て 諸宗の違目と法華経の深義を談ずるほど

とし 返

に、年もかえりぬ。

ひと こころ さどのくに じさい ねんぶつしゃ

いづくも人の心のはかなさは、佐渡国の持斎・念仏者の

ゆいあみだぶつ しょうゆぼう いんしょうぼう じどうぼうとう すうひやくにん 寄 あ

唯阿弥陀仏・性諭房・印性房・慈道房等の数百人、より合

せんぎ うけたまわ き あみだぶつ だいおんてき いっさい

つて僉議すと 承 る。「聞こうる阿弥陀仏の大怨敵、一切

しゅじょう あくちしき にちれんぼう くに 流

衆生の悪知識の日蓮房、この国にながされたり。なにとな

くに なが ひと しじゅう生

くとも、この国へ流されたる人の始終いけらるることなし。

生

帰

う

殺

たといいいけらるるとも、かえることなし。また打ちころし

おん 答

つかはら

ところ

いちにん

たりとも、御とがめなし。塚原という所にただ一人あり。

剛

ちから

ひと

ところ

あつ

いかにごうなりとも、力つよくとも、人なき処なれば、集

射 殺

い 者

まっていころせかし」と云うものもありけり。また、「なに

くび き

こうのとの

みだいどころ

となくとも頸を切らるべかりけるが、守殿の御台所の

ごかいにん

切

つい

いちじよう

聞

御懐妊なれば、しばらくきられず。終には一定ときく」。

い ろくろろうざえものじようどの

もう

切

計

また云わく「六郎左衛門尉殿に申して、きらずんばはから

い おお ぎ なか

しゆごしよ

うべし」と云う。多くの義の中に、これについて守護所に

すうひやくにんあつ

数百人集まりぬ。

ろくろろうざえもんのじよう

い

かみ

ころ

そえじようくだ

六郎左衛門尉の云わく「上より殺しもうすまじき副状下

悔

るにん

過

つて、あなずるべき流人にはあらず。あやまちあるならば、

しげつら

おお

とが

ほうもん

責

重連が大いなる失なるべし。それよりは、ただ法門にてせめ

い

ねんぶつしやとう

じようど

さんぶきよう

よかし」と云いければ、念仏者等、あるいは浄土の三部経、

しかん

しんごんとう

こぼうしとう

くび

駆

あるいは止観、あるいは真言等を、小法師等が頸にかけさ

脇

挟

しろうがつじゅうろくにち

せ、あるいはわきにはさませて、正月十六日にあつまる。

さどのくに

えちご

えつちゆう

でわ

おうしゆう

しなのとう

くにぐに

佐渡国のみならず、越後・越中・出羽・奥州・信濃等の国々

あつ

ほつしとう

つかはら

どう

おおにわ

さんや

より集まれる法師等なれば、塚原の堂の大庭、山野に

すうひやくにん

ろくろろうざえもんのじようきようだいいつか

ひやくせい

数百人、六郎左衛門尉兄弟一家、さならぬもの、百姓の

にゆうどうとう

数

知

あつ

入道等、かずをしらず集まりたり。

ねんぶつしや

くちぐち

あつく

しんごんし

めんめん

いろ

うしな

念仏者は口々に悪口をなし、真言師は面々に色を失い、

てんだいしゆう

すぐ

由

旬

ざいけ

もの

き

天台宗ぞ勝るべきよしをののしる。在家の者どもは「聞こ

あみだぶつ

敵

旬

騒

響

うる阿弥陀仏のかたきよ」とののしりさわぎひびくこと、

しんどう

らいでん

にちれん

騒

のち

おのおの

震動・雷電のごとし。日蓮はしばらくさわがせて後、「各々

静

たま

ほうもん

おん

おんわた

あつく

しずまらせ給え。法門の御ためにこそ御渡りあるらめ。悪口

とう

もう

ろくろうざえもん

はじ

しよにん

等よしなし」と申せしかば、六郎左衛門を始めて諸人、「し

あつく

ねんぶつしや

素

首

突

出

かるべし」とて、悪口せし念仏者をばそくびをつきいだし

ぬ。

しかん しんごん ねんぶつ ほうもん いちいち とう しょう ぶく
さて、止観・真言・念仏の法門、一々にかれが申す様をでつ

しあげて、承伏せさせては、ちようとはつめつめ、一言二言
詰 しゃごんにごん

にはすぎず。鎌倉の真言師・禅宗・念仏者・天台の者より
かまくら しんごうし ぜんしゆう ねんぶつしや てんだい もの

もはかなきものどもなれば、ただ思いやらせ給え、利剣を
果 無 者 おも たま りけん
瓜 切 おおかせ くさ 靡 ぶつぼう

もつてうりをきり、大風の草をなびかすがごとし。仏法の
疎 じごそうい

おろかなるのみならず、あるいは自語相違し、あるいは
きようもん ろん い しゃく ろん い ぜんどう

経文をわすれて論と云い、釈をわすれて論と云う。善導が
やなぎ お こうぼうだいし さんこ な だいにちによらい げん

柳より落ち、弘法大師の三鈷を投げたる、大日如来と現じ
とう もうご もの 狂

たる等をば、あるいは妄語、あるいは物にくるえるところ

いちいち 責

あつく

くちと

を一々にせめたるに、あるいは悪口し、あるいは口を閉じ、

いろ うしな

ねんぶつ 僻 ごと

い

あるいは色を失い、あるいは「念仏ひが事なりけり」と云

とうぎ けさ ひらねんじゆ

ねんぶつ

うものもあり。あるいは当座に袈裟・平念珠をすてて、念仏

もう

せいじよう

た もの

申すまじきよし、誓状を立つる者もあり。

みなひとた かえ

ろくろうざえものじよう

た かえ

いつけ もの

皆人立ち帰るほどに、六郎左衛門尉も立ち帰る。一家の者

かえ にちれん ふしぎひと

おも

ろくろうざえものじよう

も返る。日蓮、不思議一つ云わんと思つて、六郎左衛門尉を

おおにわ

呼 かえ い

かまくら

上 たも

大庭よりよび返して云わく「いつか鎌倉へのぼり給うべき」。

こた

い

げにん

のう

しちがつ

ころ

かれ、答えて云わく「下人どもに農せさせて、七月の比」

うんぬん

にちれん い

ゆみや

もの

公

おんだいじ

遭

と云々。日蓮云わく「弓箭とる者は、おおやけの御大事にあ

しよりよう

たま

そうろう

でんぱた

もう

いて、所領をも給わり候をこそ。田畠つくととは申せ、

ただいま

戦

いそ

打

上

こうみよう

しよち

只今いくさのあらんずるに、急ぎうちのぼり高名して所知

たま

わどのぼら

相模

くに

な

を給わらぬか。さすがに和殿原はさがみの国には名ある

さむらい

いなか

た

戦

外

はじ

侍ぞかし。田舎にて田つくりいくさにはずれたらんは、恥

もう

おも

慌

物

なるべし」と申せしかば、いかにや思いけめ、あわててももの

言

ねんぶつしや

じさい

ざいけ

もの

もいわず。念仏者・持斎・在家の者どもも、「なにというこ

あや

とぞや」と怪しむ。

みなかえ

こそ

じゆういちがつ

かんが

かいくししよう

さて皆帰りしかば、去年の十一月より勘えたる開目抄

もう

もんにかんつく

くびき

にちれん

ふしぎ

と申す文二卷造りたり。頸切らるるならば日蓮が不思議と

どめんと思つて勘えたり。この文の心は、日蓮によりて

にほんこく

うむ

たと

いえ

はしら

保

日本国の有無はあるべし。譬えば、宅に柱なければたもた

ひと

たましい

しびと

にちれん

にほん

ひと

たましい

ず、人に魂なければ死人なり。日蓮は日本の人の魂なり。

へいのさえもん

すで

にほん

はしら

倒

ただいま

よみだ

平左衛門、既に日本の柱をたおしぬ。只今、世乱れて、そ

夢

もうごしゅつたい

ごいちもん

れともなくゆめのごとくに妄語出来して、この御一門

同士討

のち

たこく

責

れい

どしうちして、後には他国よりせめらるべし。例せば、

りっしょうあんこくろん

くわ

か

立正安国論に委しきがごとし。かように書き付けて、

なかつかさのさぶろうぎさえものじょう

つか

取

付

でしとう

中務三郎左衛門尉が使いにとらせぬ。つきたる弟子等も、

荒 義

おも

ちからおよ

あらぎかなと思えども、力及ばざりげにてあるほどに、

にがつ じゆうはちにち しま ふね着 かまくら いくさ

二月の十八日に島に船つく。鎌倉に軍あり、京にもあり、

様 もう

そのよう申すばかりなし。

ろくろうざえものじよう

よ 早 船

いちもんあいぐ

六郎左衛門尉、その夜にはやふねをもつて一門相具して

渡

にちれん

掌

あ

たま

わたる。日蓮にたなごころを合わせて、「たすけさせ給え。

い しょうがつじゆうろくにち おんことば

うたが

去ぬる正月十六日の御言、『いかにや』とこのほど疑い

もう

さんじゆうにち

うち

合

そうら

申しつるに、いくほどなく三十日が内にあい候いぬ。ま

もうここく

いちじようわた

そうろう

ねんぶつむけんじごく

いちじよう

た蒙古国も一定渡り候いなん。念仏無間地獄も一定に

そうら

なが

ねんぶつもう

そうろう

もう

てぞ候わんずらん。永く念仏申し候まじ」と申せしかば、

い

さがみのかみどのとう

もち

たま

にほん

「いかに云うとも、相模守殿等の用い給わざらんには、日本

こく ひともち

もち

くにかなら

ほろ

にちれん

国の人用いるまじ。用いずば、国必ず亡ぶべし。日蓮は

ようじやく もの

ほけきよう

ひろ

しやかぶつ

おんつか

幼若の者なれども、法華経を弘むれば釈迦仏の御使いぞか

てんしやうだいじん

しやうはちまん

もう

くに

し。わずかの天照太神・正八幡などと申すは、この国に

おも

ほんしやく

にちがつ

してん

たい

しやうじん

は重けれども、梵釈・日月・四天に対すれば小神ぞかし。

じにん

過

ひと

ころ

されども、この神人などをあやまちぬれば、ただの人を殺

しちにんはん

もう

だじやうのにゆうどう

おきのほうおうとう

せるには七人半など申すぞかし。太政入道・隠岐法皇等

滅

たま

似

のほろび給いしはこれなり。これは、それにはにるべくも

きやうしゆしやくそん

おんつか

てんしやうだいじん

しやうはちまんぐう

なし。教主釈尊の御使いなれば、天照太神・正八幡宮も

こうべ

傾

て

あ

ち

ふ

たも

頭をかたぶけ、手を合わせて、地に伏し給うべきことなり。

ほけきよう ぎようじゃ

ぼんしゃく

そう

はべ

にちがつ

ぜんご

て

法華經の行者をば、梵釈、左右に侍り、日月、前後を照ら

たも

にちれん

もち

悪

敬

くにほろ

し給う。かかる日蓮を用いぬるとも、あしくうやまわば国亡

すうひやくにん

憎

にど

なが

ぶべし。いかにいわんや、数百人にくませ、二度まで流し

くに ほろ

うたが

きん

ぬ。この国の亡びんこと疑いなかるべけれども、しばらく禁

くに

たま

にちれん

控

いま

をなして『国をたすけ給え』と日蓮がひかうればこそ、今ま

あんのん

法 す

ばち

では安穩にありつれども、ほうに過ぐれば罰あたりぬるなり。

たび

もち

だいもうここく

う

て

む

にほん

また、この度も用いずば、大蒙古国より打つ手を向けて日本

こく

へいのさえものじよう

この

災

国ほろぼさるべし。ただ平左衛門尉が好むわざわいななり。

わどのばら

しま

あんのん

もう

和殿原とても、この島とても、安穩なるまじきなり」と申せ

しかば、あさましげにて立ち帰りぬ。た かえ

さて、在家の者ども申しけるは「この御房は神通の人にごぼう じんずう ひと

てましますか。あらおそろし、おそろし。今は念仏者をもいま ねんぶつしゃ

やしない持齋をも供養すまじ」。念仏者、良観が弟子の持齋養 じさい くよう

等が云わく「この御房は謀叛の内に入りたりけるか」。さて、とう い ごぼう むほん うち い

しばらくありて世間しずまる。せけん

また念仏者集まりて僉議す。「こうてあらんには、我らねんぶつしゃあつ せんぎ われ

かつえしぬべし。いかにもして、この法師を失わばや。既餓 死 ほうし うしな すで

に国の者も大体つきぬ。いかんがせん」。念仏者の長者の唯くに もの だいたい 付 ねんぶつしゃ ちようじゃ ゆい

あみだぶつ じさい ちょうじや しょうゆぼう りょうかん でし どうかんと
阿弥陀仏、持斎の長者の性諭房、良観が弟子の道観等、
かまくら はし のぼ むさしのかみどの もうごぼう しま そうろう

鎌倉に走り登って武蔵守殿に申す。「この御房、島に候も

どうとういちう そうろう

そういちにん

そうろう

のならば、堂塔一字も候べからず。僧一人も候まじ。

あみだぶつ

ひい

かわ

よる

阿弥陀仏をば、あるいは火に入れ、あるいは河にながす。夜

昼

たか やま

のぼ

にちがつ

む

だいおんじよう

はな

もひるも高き山に登って、日月に向かつて大音声を放って

かみ

じゆそ

たてまつ

おんじよう

いつこく

き

もう

上を呪詛し奉る。その音声、一国に聞こう」と申す。

むさしのぜんじどの

聞

かみ

もう

武蔵前司殿、これをきき、「上へ申すまでもあるまじ。ま

こくちゆう

にちれんぼう

付

くに

追

ず国中のもの、日蓮房につくならば、あるいは国をおい、

牢

い

わたくし

げち

くだ

くだしぶみくだ

あるいはろうに入れよ」と私の下知を下す。また下文下

さんど

あいだ

もう

こころ

る。かくのごとく三度。その間のこと、申さざるに心を

はか

まえ

通

い

もつて計りぬべし。あるいはその前をとおれりと云つて

牢

い

ごぼう

もの

進

い

ろうに入れ、あるいはその御房に物をまいらせけりと云つ

くに

追

さいし

捕

かみ

て国をおい、あるいは妻子をとる。かくのごとくして、上へ

よし

もう

あん

そうい

い

ぶんえいじゅういちねん

この由を申されければ、案に相違して、去ぬる文永十一年

にがつじゅうよつか

ごしやめん

じょう

どうさんがつようか

しま

着

二月十四日の御赦免の状、同三月八日に島につきぬ。

ねんぶつしやとう

せんぎ

い

ほど

あみだぶつ

おんかたき

念仏者等、僉議して云わく「これ程の阿弥陀仏の御敵、

ぜんどうおしよう

ほうねんしようにん

罵

もの

ごかんき

善導和尚・法然上人をのるほどの者が、たまたま御勘気を

こうむ

しま

はな

ごしやめん

生

かえ

蒙つてこの島に放されたるを、御赦免あるとて、いけて帰

こころ憂

い

様

々

したく

さんは心うきことなり」と云つて、ようようの支度ありし

おも

じゅんぷうふ

かども、いかなることにやありけん、思わざるに順風吹き

きた

しま

発

間

悪

ひやくにち

ごじゆうにち

来つて島をばたちしかば、あわいあしければ百日・五十日

渡

じゅんぷう

みっか

しゆゆ

あいだ

わた

にもわたらず順風には三日なるところを、須臾の間に渡

りぬ。

えちご

国府

しなの

ぜんこうじ

ねんぶつしゃ

じさい

しんごんとう

越後のこう、信濃の善光寺の念仏者・持斎・真言等は、

うんじゆう

せんぎ

しま

ほっしばら

いま

生

帰

ひと

雲集して僉議す。「島の法師原は、今までいけてかえすは人

乞 丐

われ

しやうじん

あみだぶつ

みまえ

かつたいなり。我らはいかにも生身の阿弥陀仏の御前をば

通

せんぎ

えちご

国府

つわもの

とおすまじ」と僉議せしかども、また越後のこうより兵者ど

数 多 にちれん 添 ぜんこうじ 通

ちからおよ

もあまた日蓮にそいて善光寺をとおりしかば、力及ばず。

さんがつじゆうさんにち しま た どうさんがつにじゆうろくにち かまくら う い

三月十三日に島を立って、同三月二十六日に鎌倉へ打ち入

りぬ。

どうしがつようか へいのさえものじよう げんざん

前 似

同四月八日、平左衛門尉に見参しぬ。さきにはにるべく

いぎ やわ 正 うえ

にゆうどう ねんぶつ

もなく、威儀を和らげてただしくする上、ある入道は念仏

問 ぞく しんごん

ひと ぜん

をとう、ある俗は真言をとう、ある人は禅をとう、

へいのさえものじよう にぜんとくどう うむ いちいち きようもん ひ

平左衛門尉は爾前得道の有無をとう。一々に経文を引い

もう

て申しぬ。

へいのさえものじよう かみ おんつか

だいもうこく

平左衛門尉は上の御使いのようにて、「大蒙古国は、い

わた そろろう もう にちれんこた い ことし いちじよう

つか渡り候べき」と申す。日蓮答えて云わく「今年は一定

にちれんいぜん かんが もう おんもち

なり。それにとつては、日蓮已前より勘え申すをば御用い

たと やまい お し ひと やまい じ

なし。譬えば、病の起こりを知らざる人の病を治せば、い

やまい ばいぞう しんごんし じようぶく

よいよ病は倍増すべし。真言師だにも調伏するならば、い

くに いくさ 負

よいよこの国、軍にまくべし。あなかしこ、あなかしこ。

しんごんし そう どうせい ほっしとう おんいの

真言師、総じて当世の法師等をもつて御祈りあるべからず。

おのおの ぶつぼう 知 たま もう 知 たま

各々は仏法をしらせ給いておわせばこそ申すともしらせ給

わめ。

ふしぎ たじ 異

またいかなる不思議にやあるらん。他事にはことにして、

にちれん もう

おんもち

のち

おも

あ

たてまつ

日蓮が申すことは御用いなし。後に思い合わせさせ奉ら

もう

おきのほうおう

てんし

ごんのだいぶどの

たみ

んがために申す。隠岐法皇は天子なり。権大夫殿は民ぞか

こ

おや

怨

てんししょうだいじん受

たま

し。子の親をあだまんをば、天照太神うけ給いなんや。

しよじゆう

しゆくん

かたき

しようはちまん

おんもち

所従が主君を敵とせんをば、正八幡は御用いあるべしや。

くげ

負

たま

いかなりければ公家はまけ給いけるぞ。これはひとえに

ただごと

こうぼうだいし

じやぎ

じかくだいし

ちしようだいし

只事にはあらず。弘法大師の邪義、慈覚大師・智証大師の

びやつけん

おも

えいざん

とうじ

おんじようじ

ひとびと

かまくら

僻見をまことと思つて、叡山・東寺・園城寺の人々の鎌倉

怨

たま

かえ

ほんにん

つ

をあだみ給いしかば、『還つて本人に著きなん』とて、その

とがかえ

くげ

たま

ぶけ

し

失還つて公家はまけ給いぬ。武家はそのこと知らずして

じようぶく おこな

勝

いま

調伏も行わざればかちぬ。今また、かくのごとくなるべ

蝦夷 ししようふち

あんどうごろう

いんが

どうり

わきま

し。えぞは死生不知のもの、安藤五郎は因果の道理を弁え

どうとうおお

つく

ぜんにん

くび

蝦夷

て堂塔多く造りし善人なり。いかにとして頸をばえぞにと

おも

ごぼう

おんいの

られぬるぞ。これをもつて思うに、この御房たちだに御祈り

にゆうどうどの

こと

遭

たま

おぼ

そうろう

あらば、入道殿、事にあい給いぬと覚え候。あなかしこ、

言

仰

そうろう

強

あなかしこ。』さ、いわざりける』とおおせ候な」と、したた

もう

つ

そうら

かに申し付け候いぬ。

帰

聞

どうしがつとおか

あみだどうのほういん

さて、かえりききしかば、同四月十日より阿弥陀堂法印に

おお

つ

あめ

おん

祈

ほういん

とうじだいいち

仰せ付けられて、雨の御いのりあり。この法印は東寺第一の

ちじん 御 室 とう おんし こうぼうだいし じかくだいし ちしようだいし しんごん
智人、おむろ等の御師、弘法大師・慈覚大師・智証大師の真言

ひほう かがみ

てんだい けごんとう しょしゅう

むね

の秘法を鏡にかけ、天台・華嚴等の諸宗をみな胸にうか

したが

とおか

きう

じゅういちにち

おおあめふ

べたり。それに随って十日よりの祈雨に、十一日に大雨下

かぜ

あめ

いちにちいちや

こうのとの

りて風ふかす、雨しずかにて一日一夜ふりしかば、守殿

ごかん

きんさんじゅうりよう

馬

様

々

おん引

出もの

御感のあまりに、金三十両、むま、ようようの御ひきで物

聞

ありときこう。

かまくらちゆう

じようげばんにん

て

くち

竦

笑

鎌倉中の上下万人、手をたたき、口をすくめてわらう

様

にちれん

僻

ほうもんもう

くび

斬

ようは「日蓮、ひが法門申して、すでに頸をきられんとせ

許

ねんぶつ

ぜん

しが、とこうしてゆりたらば、さてはなくして、念仏・禅を

謗

しんごん

みつきよう

謗

そしるのみならず、真言の密教なんどもそしるゆえに、

ほう

駭

罵

にちれん

でし

かかる法のしるしめでたし」とののしりしかば、日蓮が弟子

とう

興醒

おん 荒 ぎ

もう

にちれん

等、きようさめて「これは御あら義」と申せしほどに、日蓮

もう

様

待

こうぼうだいし

あくぎ

実

くに

が申すようは「しばしまて。弘法大師の悪義まことにて、国

おん

おきのほうおう

戦

勝

たま

の御いのりとなるべくば、隠岐法皇こそいくさにかち給わ

御

室 さいあい

ちご

勢

多

伽

くび

斬

こうぼう

め。おむろ最愛の児・せいたかも頸をきらられざるらん。弘法

ほけきよう

けごんぎよう

劣

書

じよう

じゅうじゅうしんろん

の法華経を華嚴経におとれりとかける状は、十住心論と

もう

ふみ

じゆりようほん

しゃかぶつ

ほんぷ

記

申す文にあり。寿量品の釈迦仏をば凡夫なりとしるされた

もん

ひぞうほうやく

そうろう

てんだいだいし

盗

びと

じよう

る文は、秘蔵宝鑰に候。天台大師をぬす人とかける状は、

にきようろん

いちじようほけきよう

説

ほとけ

しんごんし

二教論にあり。一乘法華經をとける仏をば真言師の

履物取

およ

じよう

しようがくぼう

しやりこう

はきものとりにも及ばずとかける状は、正覚房が舍利講

しき

ひがごと

もう

ひと

でし

あみだどうのほういん

の式にあり。かかる僻事を申す人の弟子・阿弥陀堂法印が

にちれん

勝

りゆうおう

ほけきよう

敵

ほんしやく

し

日蓮にかつならば、竜王は法華經のかたきなり。梵釈・四

おう責

しさい

もう

でし

王にせめられなん。子細であらんずらん」と申せば、弟子ど

しさい

痴

ものいわく「いかなる子細のあるべきぞ」とおこづきしほ

にちれんい

ぜんむい

ふくう

あめ

あめ

どに、日蓮云わく「善無畏も不空も、雨のいのりに雨はふ

おおかせふ

見

こうぼう

さんしちにち

りたりしかども、大風吹いてありけるとみゆ。弘法は三七日

あめ

あめ

すぎて雨をふらしたり。これらは雨ふらさぬがごとし。

さんしちにじゅういちにち

あめ

三七二十一日にふらぬ雨やあるべき。たといふりたりとも、

ふしぎ

てんだい

せんかん

なんの不思議かあるべき。天台のごとく、千観なんのご

いちぎ

尊

いちじょう

様

とく、一座なんどこそとうとけれ。これは一定、ようある

言

おおかせふ

きた

べし」といいもあわせず、大風吹き来る。

だいしよう

しやたく

どうとう

こぼく

ごしよとう

てん

ふ

大小の舎宅・堂塔・古木・御所等を、あるいは天に吹き

上

ち

ちふい

空

おお

ひか

もの飛

のぼせ、あるいは地に吹き入れ、そらには大いなる光り物と

ち

とうりよう

ひとびと

吹

殺

ぎゆうば

多

び、地には棟梁みだれたり。人々をもふきころし、牛馬おお

倒

あくふう

あき

とき

許

くたおれぬ。悪風なれども、秋は時なればなおゆるすかた

なつしがつ

うえ

にほんこく

もあり。これは夏四月なり。その上、日本国にはふかず。

ただ関東八箇国、八箇国にも武蔵・相模の両国、両国の中

かんとうはちかこく はちかこく むさし さがみ りょうごく りょうごく なか
そうしゅう 鎌倉

には相州につよくふく。相州にもかまくら、かまくらに

ごしよ わかみや けんちようじ ごくらくじとう 只 ごと

も御所・若宮・建長寺・極楽寺等につよくふけり。ただ事と

祈 覚

もみえず。ひとえに、このいのりのゆえにやとおぼえて、

笑 くち 竦 ひとびと 興 醒 うえ わ

わらい口すくめせし人々もきようさめてありし上、我が

でし ふしぎ した 振

弟子どもも「あら不思議や」と舌をふるう。

もちも さんどくに

本よりごせしことなれば、「三度国をいさめん、もちい

くに どうごがつじゆうにち

ずば国をさるべし」と。されば、同五月十二日にかまくら

やま い どうじゆうがつ だいもうここく いき

をいでてこの山に入る。同十月に大蒙古国よせて、壱岐・

つしまにかこくうと

対馬の二箇国を打ち取らるるのみならず、大宰府もやぶら

だざいふ

にゆうどう おおともとう

れて、少弐入道・大友等、ききにげににげ、その外の兵者

ほか つわもの

だいたいう

ども、そのことともなく大体打たれぬ。また今度よせくる

こんど

くに み

ならば、いかにもこの国よわよわと見ゆるなり。

にんのうきよう

しようにんさ

とき

しちなんかなら

お

とう

仁王経には「聖人去らん時は、七難必ず起こらん」等

うんぬん

さいしようおうきよう

い

あくにん

あいぎよう

ぜんにん

じばつ

云々。最勝王経に云わく「悪人を愛敬し善人を治罰する

よ

ゆえ ないしたほう

おんぞくきた

こくじんそうらん

あ

とう

に由るが故に乃至他方の怨賊来つて、国人喪乱に遭わん」等

うんぬん

ぶつせつ

実

くに

いちじようあくにん

こくしゆ

云々。仏説まことならば、この国に一定悪人のあるを国主

尊

たま

ぜんにん

怨

たも

だいじつきよう

い

たつとませ給いて、善人をあだませ給うにや。大集経に云

にちがつ みよう げん しほうみなこうかん

ふぜん

わく「日月も明を現ぜず、四方皆亢旱す。かくのごとき不善

ごう あくおう あくびく わ しようほう きえ うんぬん にんのうきよう い

業の悪王・悪比丘、我が正法を毀壞す」云々。仁王経に云

もろもろ あくびく おお みようり もと こくおう たいし おうじ

わく「諸の悪比丘は、多く名利を求め、国王・太子・王子

まえ みずか はぶつぼう いんねん はこく いんねん と

の前において、自ら破仏法の因縁、破国の因縁を説かん。

おうわきま ことば しんちよう はぶつぼう は

その王別えずしてこの語を信聴せん。これを破仏法・破

こく いんねん とううんぬん ほけきよう い じよくせ あくびく

国の因縁となす」等云々。法華経に云わく「濁世の悪比丘」

とううんぬん きようもん くに いちじようあくびく

等云々。経文まことならば、この国に一定悪比丘のある

そ ほうざん きよくりん 伐 たいかい しがい 留

なり。夫れ、宝山には曲林をきる。大海には死骸をとどめ

ぶつぼう たいかい いちじよう ほうざん ごぎやく がりやく しじゆう

ず。仏法の大海、一乗の宝山には、五逆の瓦礫、四重の

じよくすい

い

濁水をば入るれども、

ひぼう

しがい

いつせんだい

きよくりん

誹謗の死骸と一闡提の曲林をば

納

おさめざるなり。されば、仏法を習わん人、後世をねがわん

ひと

ほつけひぼう

恐

人は、法華誹謗をおそるべし。

みなひと 思

こうぼう じかくとう

謗

ひと

皆人おぼするようは「いかでか弘法・慈覚等をそしる人を

もち

たにん

あわのくに

とうざい

ひとびと

用いるべき」と。他人はさておきぬ、安房国の東西の人々は、

しん

がんぜん

げんしよう

このことを信ずべきことなり。眼前の現証あり。いのもり

えんどんぼう

きよすみ

さいぎようぼう

どうぎぼう

片

海

じっちぼうとう

の円頓房、清澄の西堯房・道義房、かたうみの実智房等は、

尊

そとう

りんじゆう

とうとかりし僧ぞかし。これらの臨終はいかんがありけん

たず

えんちぼう

きよすみ

だいどう

と尋ぬべし。これらはさておきぬ。円智房は、清澄の大堂に

さんかねん あいだ いちじさんらい ほけきよう われ 書

して三箇年が間、一字三礼の法華経を我とかきたてまつり

じっかん 空 覚 ごじゆうねん あいだ いちにちいちや にぶ

て、十巻をそらにおぼえ、五十年が間、一日一夜に二部ず

読 みなひと ほとけ 成

つよまれしぞかし。かれをば皆人は「仏になるべし」と云々。

にちれん ねんぶつしや どうぎぼう えんちぼう むけんじごく そこ

日蓮こそ「念仏者よりも道義房と円智房とは無間地獄の底に

墮 おつべし」と申したりしが、この人々の御臨終はよく候い

けるか、いかに。日蓮なくば、この人々をば仏になりぬら

んとこそおぼすべけれ。 思 にちれん ひとびと ほとけ

これをもつてしろしめせ。弘法・慈覚等はあさましきこ

とどもはあれども、弟子どもも隠せしかば、公家にもしらせ給

とどもはあれども、弟子どもも隠せしかば、公家にもしらせ給

とどもはあれども、弟子どもも隠せしかば、公家にもしらせ給

とどもはあれども、弟子どもも隠せしかば、公家にもしらせ給

とどもはあれども、弟子どもも隠せしかば、公家にもしらせ給

とどもはあれども、弟子どもも隠せしかば、公家にもしらせ給

わす。末すえの代よはいよいよあおぐなり。あ仰らわす人ひとなくば、

みらいえいごう

くるげどう

はっびやくねん

みず

未来永劫までもさてあるべし。拘留外道は八百年ありて水

かびらげどう いせんねん

とが

となり、迦毘羅外道は一千年すぎてこそ、その失はあらわ

れしか。

そ じんしん 受

ごかい ちから

ごかい たも

夫れ、人身をうくることは五戒の力による。五戒を持って

もの にじゅうご ぜんじん

守 うえ どうしようどうみよう

もう

る者をば、二十五の善神これをまぼる上、同生同名と申し

ふた てん う

そう 肩 しゆご

て二つの天、生まれしよりこのかた左右のかたに守護する

とが きじん 怨

くに

ゆえに、失なくて鬼神あだむことなし。しかるに、この国の

むりよう しょにん 歎

壱岐 対 馬 りようごく

無量の諸人、なげきをなすのみならず、ゆき・つしまの両国

ひと みなこと

だざいふ

もう

くに

の人、皆事にあいぬ。大宰府また申すばかりなし。この国は

失

知

いちにん

いかなるとがのあるやらん。しらまほしきことなり。一人

ににん

とが

ひとびと

二人こそ失もあるらめ、そこばくの人々いかん。これひと

ほけきよう

下

こうぼう

じかく

ちしようとう

すえ

しんごんし

えに、法華経をさぐる弘法・慈覚・智証等の末の真言師、

ぜんどう

ほうねん

すえ

でしとう

だるまとう

ひとびと

すえ

もの

こくちゆう

善導・法然が末の弟子等、達磨等の人々の末の者ども、国中

じゆうまん

ゆえ

ぼんしゃく

してんとう

ほけきよう

ざ

せいじよう

に充満せり。故に、梵釈・四天等の、法華経の座の誓状

ずはさしちぶん

こうべわ

しちぶん

な

とが

当

のごとく、「頭破作七分（頭破れて七分に作る）」の失にあ

てらるるなり。

うたが

い

ほけきよう

ぎようじや

怨

もの

疑って云わく、「法華経の行者をあだむ者は

ずはさしちぶん

説

そうろう

にちれんぼう

謗

こうべ

『頭破作七分』ととかれて候に、日蓮房をそしれども頭

破

にちれんぼう

ほけきよう

ぎようじや

もう

もわれぬは、日蓮房は法華經の行者にはあらざるか」と申

どうり

覚

そうろう

すは道理なりとおぼえ候は、いかん。

こた

い

にちれん

ほけきよう

ぎようじや

もう

答えて云わく、日蓮を法華經の行者にてなしと申さば、

ほけきよう

抛

書

ほうねんとう

むみよう

へんいき

記

法華經をなげすてよとかける法然等、無明の辺域としるせ

こうぼうだいし

りどうじしよう

の

ぜんむい

じかくとう

ほけきよう

る弘法大師、理同事勝と宣べたる善無畏・慈覚等が、法華經

ぎようじや

すはさしちぶん

もう

の行者にてあるべきか。また「頭破作七分」と申すことは、

かたな

切

破

知

いかなることぞ。刀をもつてきるようにおるとしれるか。

きようもん

ありじゆ

えだ

説

經文には「阿梨樹の枝のごとくならん」とこそとかれたれ。

ひと ころべ しちてき しちきぎん いてきく ころべ 痛

人の頭に七滴あり。七鬼神ありて、一滴食らえば頭をいた

さんてき く いのちた

む。三滴を食らえば寿絶えんとす。七滴皆食らえば死する

しちてきみなく

いま よ ひとびと

みな こうべありじゆ えだ

破

なり。今の世の人々は、皆、頭阿梨樹の枝のごとくにわれ

あくごう 深

知

れい

手 負

たれども、悪業ふかくしてしらざるなり。例せば、てをおい

ひと

さけ 酔

寝入

覚

たる人の、あるいは酒にえい、あるいはねいりぬれば、おぼ

えざるがごとし。

ずは さしちぶん

もう

しんは さしちぶん

また「頭破作七分」と申すは、あるいは「心破作七分」と

もう

いただき

かわ

そこ

ほね

し

も申して、頂の皮の底にある骨のひびたうるなり。死ぬる

とき

破

いま

よ

ひとびと

い

しょうか

時はわるることもあり。今の世の人々は、去ぬる正嘉の

おおじしん ぶんえい だいすいせい みなこうべ そうろう こうべ

大地震、文永の大彗星に、皆頭われて候なり。その頭の

とき 病 ござう そんな とき 赤 はら

われし時、ぜいぜいやみ、五臓の損ぜし時、あかき腹をやみ

ほけきよう ぎようじや 謗 当 ばち

しなり。これは、法華経の行者をそしりしゆえにあたりし罰

とはしらずや。

しか あじ ゆえ ひと ころ かめ あぶら ゆえ いのち

されば、鹿は味ある故に人に殺され、亀は油ある故に命

がい によにん 見 目かたち そね ものおお くにおさ

を害せらる。女人はみめ形よければ嫉む者多し。国を治む

もの たこく おそ たからあ もの いのちあや ほけきよう たも

る者は他国の恐れあり。財有る者は命危うし。法華経を持

もの かなら じようぶつ そうろうゆえ だいろくてん まおう もう さんがい しゆ

つ者は必ず成仏し候故に、第六天の魔王と申す三界の主、

きよう たも ひと そね そうろう まおう

この経を持つ人をばあながちに嫉み候なり。この魔王、

えきびよう かみ め み ひと つ そうろう ふるざけ

疫病の神の、目にも見えずして人に付き候ように、古酒

ひと よ そうろう こくしゆ ふぼ さいし つ ほけきよう

に人の酔い候ごとく、国主・父母・妻子に付いて法華経の

ぎようじや そね み そうろう すこ たが とうじ よ

行者を嫉むべしと見えて候。少しも違わざるは当時の世

そうろう にちれん なんみようほうれんげきよう とな ゆえ にじゆうよねん

にて候。日蓮は南無妙法蓮華経と唱うる故に、二十余年

ところ お にど ごかんき こうむ さいご やま

所を追われ、二度まで御勘気を蒙り、最後にはこの山に

籠

こもる。

やま てい にし しちめん やま ひがし てんし 岳

この山の体たらくは、西は七面の山、東は天子のたけ、

きた みのぶ やま みなみ たかとり やま よつ やま たか てん つ

北は身延の山、南は鷹取の山。四つの山、高きこと天に付

険 ひちよう 飛 なか よつ かわ

き、さがしきこと飛鳥もとびがたし。中に四つの河あり。

ふじかわ はやかわ おおしろがわ みのぶがわ なか いつちよう

いわゆる富士河・早河・大白河・身延河なり。その中に一町

はぎま そうろう あんじち むす そうろう ひる ひ よる

ばかり間の候に庵室を結んで候。昼は日を見ず、夜は

つき はい ふゆ ゆきふか なつ くさしげ と ひとまれ みち

月を拝せず。冬は雪深く、夏は草茂り、問う人希なれば道を

踏 分 難 こと ことし ゆきふか ひとと

ふみわくることかたし。殊に今年は雪深くして人間うこと

いのち ご ほけきよう 恃 たてまつ そうろう

なし。命を期として法華経ばかりをたのみ奉り候に、

おんおとずれ そうろう 知 しゃかぶつ おんつか かこ

御音信ありがたく候。しらず、釈迦仏の御使いか、過去の

ふ ぼ おんつか もう そうろう なんみようほうれんげきよう

父母の御使いかと、申すばかりなく候。南無妙法蓮華経、

なんみようほうれんげきよう

南無妙法蓮華経。

